グリーンエッジ改良にメドつく。ほぼ全ホールでベント芝の張り付けへ。実験成功で手応え。

来年の国体開催を目指して北・南コースの改良が進み、メンバー、ビジターを問わず「数年前に比べると、格段にいいコースに仕上がって来ている」という声が聞かれるようになった。これは、コース管理を株式会社「那須ナーセリー」（落合潤社長）への委託方式に切り替えた成果ともいえそうで、残りはとくに南コースのグリーンエッジ部分の芝枯れ対策が大きな課題となっている。これも、那須ナーセリーが北6番で実験的に取り入れたベント芝の張り付けによる改良結果が成功し、塩原ゴルフクラブはこの方式による改良を急ぐことになった。

塩原カントリークラブは「コースは平坦だが、グリーンは砲台で小さくて難しい」といわれてきた。ただ、「そこが塩カンの魅力」というメンバーも少なくなかった。塩カンのグリーン周りの芝はグリーン上がベント芝で、その周囲のグリーンエッジ部分が高麗芝、その外側が野芝という配置。

エッジ部分の高麗芝は冬の日照不足に弱く、とくに雪による凍結が加わると致命的だ。南コースはグリーンサイドの赤松や樹木が生長し、冬場は午前中の日差しがほとんど当たらず、凍結して雪が消えるのが遅い。南1番でさえ、西日が相当あたるが、午前中は日差し不十分だ。

こうしたグリーンエッジ部分は、シーズンになっても芝の生育が悪く、ひどいホールはグリーンが砂地で鉢巻きを巻いたような見えところもある。1番でさえまだら模様だ。

こうした状態を改良するため、コース管理に当たる那須ナーセリーから提案があり、北コースで被害が大きい6番で改良実験を実施していた。グリーンの高麗芝の部分（幅約1㍍）をはがし、養生されたベント芝を張り付けるもの。数週間で根付くため、あとは刈り込みによって、グリーンエッジとして再生させられる。また、同じベント芝なのでグリーン面に変えることも可能だという。

コース管理の委託、1年で成果！

ゴルフクラブ側がコース管理を那須ナーセリーに委託してから、9月で1年となる。同社は塩カンのほか複数のコースの管理を受託し、修理用の芝の養生も自社でやっており管理の知見も豊富だ。塩カンを受託以来、フェアウエーからグリーン回りまで手厚いメンテナンスを実行、コース改良についてもいくつかの提案をしており、北6番の実験もそのひとつだった。

さらに、コース杭の交換を手始めに、グリーン回りの雑草取り、目土入れなど、カントリークラブ側もコース委員会の提案によるボランティア活動もあり日ごとコースの見栄えが良くなっている。しばらく足の遠のいていたベテランメンバーから「昔のコースの感じが蘇ってくるようだ。これなら、ここに戻って来る気が起きる」という声も聞かれた。

プレーをしながら 27 ホールを見分した豊田本憲・ゴルフクラブ会長も、北6番の実験結果を聞いて、「早速その方式を取り入れたい。これでまた一段と良くなる」と太鼓判を押しながら、なお一層のコース改良に意欲をみせていた。

コース中心線のイメージを出しやすく。中心杭に白ペンキ表示。

国体競技が行われる北・南コースについて、ヤーデージブックを制作した折りに、フェアウエイに150,100 ヤードのカラーポイント、グリーンの中心点を示す木杭をグリーンエッジに埋め込んだ。中心線をイメージするのに役だったが、芝が伸びて刈り込みを繰り返すうちに、杭の位置がわかりにくくなり、捜すのに苦労するホールも出ていた。

このため、緑川文雄キャプテン、早坂幸治コース委員長らがヤーデージブックを手に各ホールの木杭の位置を確認した。そのうえで、芝が伸びても目視がし易いように杭の位置に、白ペンキでマル印をつけることになった。これで、グリーンの先端の目印まで、中心線をイメージし易くなって好評を得そうだ。

お盆の長雨、大きな被害。痛いキャンセルほぼ 400 人。

今年の夏はお盆をはさんで、全国的に長雨、低温の異常気象にたたられた。塩原カンのリークラブも7月末の集中豪雨により、クラブハウスのロビー、キャディーマスター室などの浸水に見舞われたのを手始めに、長雨によるキャンセルなど予想外の被害にさらされた。

浸水があったのは、7 月 29 日夕方の集中豪雨で、クラブハウス前の駐車場の雨水がマンホールに飲み込み切れなくなり、玄関の段差を越え、ロビーに侵入してくるぶし近くまでの浸水となった。また、北1番へのカート道から練習場へ登る道筋からは大量の雨水がキャディーマスター室前に流れ込み、マスター室も浸水の事態となった。

8月に入ってからの長雨では、8,9 日の日、月曜日の二日間で 81 人のキャンセル、10 日は栃木県に緊急事態宣言が出されて 29 人のキャンセル。本格的な長雨となった 13 日から 15 日までのお盆期間のキャンセルは 284 人のぼった。

こうしたキャンセルだけでなく、落雷によって散水用地下水の汲み上げポンプ、イノシシよけの電気柵の配電装置もショートし、専門業者に依頼して回復を急いでいる。自然現象とはいえコロナ禍の最中、コース運営上、想定外の痛手となっている。

キャンペーンで新メンバー33 人

昨年 11 月から今年6月まで、新規会員募集の特別キャンペーンを展開してきたが、期間中、個人 33 人、法人1の応募があった。当初の目標である新規会員獲得 100 人には届かなかったが、会員減少に悩んでいるコースが多い中での反転攻勢の機運にゴルフクラブ側でも手応えを感じている。

塩原カントリークラブ！攻略編！！【北コース】　― 中里　鉄也プロ ―

☆北コース８番 ☆

【コース解説】
打ち下ろし緩やかな左ドッグレックのロングホール！

【中里プロからのアドバイス】
１打目は、フェアウェイ真ん中１本松狙い。
２打目は、フェアウェイやや左の１本松狙い。
２打目は２オン狙いか、刻みで３オン狙いかで変わってくる。
グリーンは左から傾斜がある為、外すなら絶対に右側が良い。
ロングホールだからと４狙いだと、６以上の可能性あり！
このホールこそ飛ばさずに安全に攻めたい。
グリーンは左奥から手前、右へと傾斜がある！

次回は、北コース９番を紹介します!!

那須の小天狗･･･小針春芳伝

井上　安正

朝鮮動乱の特需に押されて輸出が急速に伸び、経済の成長を促し高度成長への基礎が固まりつつあった。東京タワーの建設計画が発表され、二月の皇太子ご成婚で火のついたテレビの普及も衰える気配はなかった。そんな世情を背に、一九五七（昭和三二）年十月二十四日から四日間、日本で初めて、第五回カナダカップが霞ヶ関カンツリー倶楽部を舞台に開かれた。

そこで、中村寅吉、小野光一のコンビが団体で、中村が個人戦で優勝を果たした。日本のプロゴルフ界にとっては革命的な出来事だった。小針は日本オープンで勝ったばかりで、出場は回避されスコアラーに回った。それでも、何の不満もなかったどころか、世界の超一流プロを目の当たりに出来るだけで胸が躍った。

前回大会で日本が四位と健闘して、この年の自国開催につながった。世界三十か国から六十選手が参加、アメリカからサム･スニード、ジミー･ディマレー、南アフリカのゲーリー･プレーヤーがいた。スニードは日本のゴルフファンからも、「ゴルフの神様」と呼ばれていた。開幕前日、霞ヶ関に隣接した東京ゴルフ倶楽部に、チームメイトのディマレーとスタッフを連れて練習に現れた。アプローチでアイアンを振るスニードを遠巻きにしたファンが見守った。

その中には、ハウスキャディーや手ぬぐいをかぶり、絣のモンペ姿で見つめるコース管理の女性達の姿もあった。練習の後、二人は気さくにこうしたギャラリーにも声をかけ、アメリカではいかにゴルフが大衆の中に根を下ろしているかを印象づけた。

カナダカップの初日はアメリカがトップに立ち、二日目はアメリカと日本が一緒に回った。10番パー3で中村がバンカーからカップインさせるなどして首位に立った。三日目も首位をキープ、最終日にアメリカに猛追されたが、9打差をつけて圧勝した。個人でも中村が通算274の大会記録でスニードに7打差をつけて優勝した。

大会は日本で初めてテレビ中継され、日本全体が祝賀ムードに包まれた。優勝した2人は、オープンカーでパレード、日本のゴルフの大衆化に火をつけた。昭和二十年代に作られたゴルフ場は十六コースだが、三十年代は前半だけで八十七コースと驚異的に増えて行った。記者団に囲まれる小野、中村の背後に、確かに小針春芳が写り込んだ写真がある。

偉業を成し遂げた中村は、一九一五（大正四）年、横浜で生まれた。十四歳でキャディーとなり、二十歳でプロデビューした。レギュラーツアー25勝、シニアツアー12勝、安田春雄、樋口久子らを育てた。

小野光一は三歳年上だが、小針とウマが合った。小野は一九一九（大正七）年、満州･大連の生まれ。本名は孫士釣。十九歳の時、中国（旧満州）･大連のゴルフ場でキャディーをしていて、「満蒙探検40年」の編者で、デパート「そごう」の副社長を務めた有富光門から、本土でプロゴルファーになることを勧められて来日、有光に生活の面倒をみてもらい、最初は霞ヶ関の研修生の宿舎に住み込んで修業を始めた。

しかし、有光が「こんな平らなコースで修業しても腕は上がらない」と起伏のきつさで名が通っていた程ヶ谷カントリークラブに移らせ、浅見録藏に預けられた。一九五〇（昭和二五）年に帰化して、妻の姓と恩人・有光の光を採って「小野光一」となった。日本オープン3勝、日本プロ1勝。小針が小野と親しかったのは、小野の霞ヶ関時代に毎冬、そこで修業を重ねた小針と、寝食を共にしたからかも知れない。小野は中国出身のプロゴルファーの草分けということになる。

小針がスニードのスイングやラウンドを目にしたのは、これが初めてだった。「力でねじ伏せるという感じの外国人選手が多いなかで、スニードは「華麗なスイング」という表現がぴったりだった。長身を生かして、大きなアークで無駄な力は全く入っていない。後年、「うっとりさせられた」と語っていた。

この年には、小針は初めての海外遠征を経験する。中村寅吉と極東オープンに参戦、羽田空港からプロペラ機でフィリピンへ。マニラ上空で、眼下にヤシの林が広がっているのが目に飛び込んで来た。あのヤシの林の下を、逃げ回った日々が蘇ってきて、「複雑な気持ちだった」という。結果は、中村が5位、小針は9位とまずまずの結果だった。

翌年の一九五八（昭和三三）年には、小野光一とカナディアンオープンに出て、海外経験にも慣れてきた。一九五九（昭和三四）年の関東オープンに優勝し、そしてオーストリア・メルボルンで開催された、第七回カナダカップに霞ヶ関カンツリー倶楽部での勝者・中村と臨んだ。

とにかく暑い季節だった。とくに、最終日が猛暑で、ギャラリーが何人も熱射病で倒れ、救急車で運ばれるような事態となった。しかも、優勝争いをしている地元オーストリアとゴルフ大国のアメリカの組のすぐ後だった。前の組は一打ごとにギャラリーから歓声が沸き、小針・中村組は毎ホールで待たされる羽目に追い込まれた。

プレーが遅かったのか、ギャラリーの熱気にあおられ、慎重になったせいだったか。前の組のスロープレーに苛立たされた。結果は中村78、小針84。コースはパー70だったから、14オーバーはひどすぎた。

14番だったと記憶しているが、「第一打をワイが右、中村が左に曲げて、このホールだけでチームで6オーバーと散々だった」という。団体は13位、個人は中村16位、小針30位だった。「考えられない。穴があったら入りたい」。そんな思いで帰国の便に乗ったのを忘れるには、長い時間がかかった。そして、一九六〇（昭和三五）年の日本オープン。この大会で、小野との奇しき因縁を結ぶことになるが、その前に、「大正五強」について触れておこう。

大正生まれの五人の強者という意味だが、小針のほか戸田藤一郎、中村寅吉、小野光一、林由郎を指す。年齢を小針と比べると、戸田は七歳、中村が六歳、林が一歳それぞれ年上、小野が三歳年下になる。

中村と小野はすでに紹介した。戸田は（大正、大正三）年、兵庫県生まれ。十歳の時に広野カントリー倶楽部でキャディーとなり、十八歳でプロに。一九五八（昭和三三）年、十九歳で宮本留吉を下して関西オープン、関西プロに優勝、二十歳で日本プロに勝ち、一九六一（昭和三六）年、日本人として初めてマスターズに出場して三十六位となった。一九六四（昭和三九）年には二十四歳で日本オープン、日本プロ、関西オープン、関西プロに勝って当時のグランドスラムを達成した。黒ズボン、シャツ、サングラスの黒ずくめで試合に臨み、無頼派ゴルフファーの異名を取った。

林由郎は一九二二（大正一一）年、千葉県我孫子市生まれ。林は十歳の時、我孫子ゴルフ倶楽部でキャディーをやらせてもらって、ハーフ十五銭、一日六十銭の日当を手に家へ帰ったら、「どこから盗んできた」としかられたことがあった。大人でも朝から晩まで働いて、日当五十銭だった。十六歳でプロ入りし、日本プロ四勝、日本オープン、関東オープン、関東プロ各二勝。後輩の育成にも取り組み、青木功、ジャンボ尾崎、飯合肇、福嶋晃子ら「我孫子一門」とも「林一門」とも呼ばれるプレーヤーを育てた。

女子プロで七十三回の優勝、長く日本人でただ一人の世界女子メジャーの勝者で、世界ゴルフ殿堂入りした元日本女子プロゴルフ協会会長の樋口久子は中村寅吉の弟子だが、バンカーを苦手としていた頃、林のもとへ教えを受けに来た。フォローでクラブを上げていたのを「腰で払えばいい。なんで上げる」と教えられ、納得した樋口が渡米し、全米女子オープンを制したのは余りにも有名だ。ゲーリー・プレーヤーがそのアプローチの教えを受け、外人プレーヤーからも尊敬されたという。

ここで、五人の強者を生んだ、大正という時代を振り返って見みる。一九一四（大正三）年、第一次世界大戦が勃発、日本も派兵はしたが戦場になることはなく、戦争物資の輸出で好景気に見舞われ、国家財政も良好となった。明治の藩閥政治の色合いが残っていた政治も政党勢力が勢いをつけ、護憲運動が高まった。いわゆる大正デモクラシーで、一九一八（大正七）年の米騒動を背景に、原敬が内閣を組織し初の平民宰相となった。

一九二三（大正一二）年の関東大震災で首都・東京は壊滅的打撃を受けた。しかし、立ち直りも早く、「大正モダン」「大正ロマン」をキャッチフレーズに多彩な文化が花を咲かせ、カフェやレストランが成長、モダンボーイ、ガールが街を闊歩し、洋装が当たり前となった。しかし、地方の労働者階級はそうした恩恵は受けられず、都会と地方の差は縮まらず、昭和恐慌へ火種を残すことになった。

五人の強者はいわば、大正ロマンという自由で闊達な文化の流れが育んだのかも知れない。しかも、ゴルフの道に入ったきっかけがキャディーだったことが、見事に共通している。キャディー上がりで忘れてならない大正生まれがもう一人いる。

日本ゴルフ殿堂入りしている石井朝夫である。小針と同じ年の生まれで、兵役も経験しており、三十歳で読売プロを制したのが初優勝で、その実力が開花したのは四十歳を超えてからと遅咲きだった。一九六三年（昭和三十八）年に関東オープンと第一回の日本シリーズを勝ち、この年から二年連続でカナダカップに日本代表で出ている。一九六四（昭和三九）年のアジアサーキット・キャピトルヒルズオープンで日本人初の優勝に輝いた。マスターズにも三年連続で招待された。

石井は尋常高等小学校の尋常科三年生で父を亡くし、母が五人兄弟を育ててくれた。六年生になって川奈ホテルでアルバイトをした時に、川奈ゴルフで日本プロが開かれ戸田藤一郎と宮本留吉の激闘を見た。プロのボールの快音に魂を奪われたように、プロゴルファーになりたくなった。

親族会議の末に許され、小学校卒業後、川奈ゴルフのキャディーマスターの助手として採用された。キャディーがクラブを握ることなどタブーだったから、サルスベリや桜の幼木で根株がついたまま採ってきて、根の部分を削ってクラブを手作りした。それを、一番はずれのホール近くの雑木の中に隠し、仕事帰りにホールに入り込んでは、ボールを打っていたという。

小針もキャディー時代、根株がついた灌木を探して、クラブを作った。那須では冬期間は季節風が吹き付け、樹木は真っ直ぐには育つことはない。だから、少々の曲がりは我慢するしかなかった。だが、静岡県の川奈では、風の影響もそう受けないから、真っ直ぐな木を見つけるのに、そう苦労はいらなかった。

林もキャディーの時、手作りクラブを作った。林が使ったのは根付きの竹だった。根こそぎ掘り出し、根の部分をドライバーヘッドの形に削って整え、本物のクラブを手にするまでそれを使って練習したという。

三人とも球を打ってみたさに、誰に教わったわけでもなく、自分で工夫してり作ったに違いない。キャディー同士が情報交換などしようと思っても、その手段がなかったが、窮すれば通じるのは同じである。ただ、土地柄による素材の違いが面白い。小さな白球に魅せられて、クラブまで手作りしていた時代があったのである。往年のスケート選手が下駄に鍛冶屋で作ってもらった刃を取り付け、氷上を滑って技術を磨いたのと通じる。

この三人とも兵役についた。小針は南方で死線を脱し、石井は陸軍の戦車整備隊で終戦を迎えた。林は近衛師団で馬の蹄鉄を打つのがうまいのを買われて、外地に行かずに済んだ。蹄鉄の釘をスナップを効かせて馬に嫌がられず、傷つけずに打てた。それが、バンカーやアプローチのヘッドの使い方のうまさにつながったと言う人もいる。

明治、大正時代のゴルフ界の草創期を支えたのは、外国商人と官僚、企業家、大地主などだった。多くは自分でもゴルフをたしなみ、技量がある段階まで到達すると、ゴルフ場の開発やそれを運営するゴルフ倶楽部の立ち上げに情熱を注いだ。

プレーヤーであり、コースの設計家だった赤石四郎、六郎の兄弟、藤田欣哉、井上誠一がそうだ。ゴルフコースの近くに生まれ育って、早い経済的自立を願った少年たちが、キャディーから見よう見まねで技量を身につけ、プロとして成功する。それを許したゴルフというスポーツは、職人的な修業を重ねて高みを極めることを果たせるという意味で、究極の“職人スポーツ”でもあった。

（つづく）

（オーストラリアのトライアスロンチーム 3 名のメンバーから頂きました。）

編集後記

コロナ禍のオリンピック・東京 2020 でわが日本は、オリンピック参加史上で最多のメダルを獲得した。組織委員長のすげ替えから始まって、開会式の演出責任者の交代など一時はどうなるかと気をもませたが、「産むが易し」だったともいえる。ただ、祭典後の余韻という点では、コロナ感染者の急拡大にかき消された感は否めない。塩原カントリークラブも那須塩原市を事前合宿地としたオーストリアのトライアスロンチームに、ランの練習場としてカート道を提供。男子 2、1 人計 3 人のメンバーから感謝の寄せ書きが届けられた。わずか数行の簡単なものだったが、当カントリークラブにとっては“小さくて大きな”レガシーとも言えよう。ただ、気がかりは尽きないもので、今年の三重国体はコロナの感染拡大で中止と決まった。さて、来年はどうか。
鬼に笑ってないで、コロナを追い払ってもらいたいものである。

（や）